
3. 品種（銘柄）等

(1) 戦後の品種改良第1号で、収量を飛躍的に向上 －ホクエイ－

北海道における小麦の品種改良は、明治の開拓使時代に、外国から導入した時から始まったといつてよいでしょう。これら導入品種の選抜試験や交配品種の育成によって、北海道の小麦栽培が行われました。しかし、いずれも草丈の高いものばかりでした。

これらの交配品種のうち、昭和2年（1927）に発表された「赤錆不知1号」は、赤錆病あかさびびょうに強く、耐冬性もあり、品質も良かったので30年以上にわたり北海道の主流品種として栽培された有名品種です。

一方で、昭和初期頃より短稈品種の育成が望まれていました。それは外国からの導入品種が耐冬性は強いですが、草丈が高く倒伏とうふく*すること、小麦の畦間に栽培されていた間作作物かんさく（大豆など）の生育に支障をきたしていたこと、などのためです。しかし、なかなか希望する短稈品種が育成されませんでした。

昭和29年（1954）になって、ようやく草丈の低い「ホクエイ」が発表されて、小麦栽培が安定するようになりました。その育成過程と特性及びその後の小麦栽培に及ぼした影響について述べることにします。

「ホクエイ」が交配されたのは、昭和17年（1942）でした。日本が米国の真珠湾攻撃をした次の年にあたり、また、中国とは全面戦争に入っており、国をあげて食糧増産に励んでいた時でした。まず草丈の低い府県品種に、耐冬性の強い北海道の「赤錆不知1号」の性質を取り入れることにしました。多くの交配が行われましたが、府県品種の「農林58号」との組み合わせから「ホクエイ」が育成されたのです。

交配は、琴似の農業試験場本場ほんじょう（当時は琴似が本場・地方が各支場と呼

んだ)で行われ、その系統が北見支場(現在の北見農試)にも分譲されて、両場で選抜育成が進められました。そのうち、北見支場で選抜された系統が、「ホクエイ」になりました。そのため、事業予算が道費で育成されたので、農林番号がついていないのです。

「ホクエイ」は、草丈が低く、茎が強靱で、分けつが多い特性を備えていましたので、それまでの小麦栽培に大きな影響を及ぼした「ホクエイ」の三大功績は、次のとおりです。

①小麦の収量を飛躍的に向上させたこと。草丈が100cm程度でした(今までの品種は120~130cmもありました)。そのため、多肥密植栽培でも倒伏しませんでしたので、10a当たり360~400kgにもなり、今までの品種の2倍の収量となりました。また、600kgの収量も容易に達成することができるようになりました。

②機械化栽培を急速に普及させたこと。もともと麦類は、世界でも最も機械化されやすい作物でしたが、北海道でも「ホクエイ」の出現によって、機械化栽培が容易に進めることができました。

③秋まき小麦が全道的に拡大されたこと。特筆すべきことは、十勝地方には秋まき小麦の作付がほとんどなかったのですが、「ホクエイ」の出現によって網走地方を凌駕して、全道第1位の作付面積を占めるようになりました。このため、十勝地方の豆作偏重の畑作経営が是正されたことも見逃す訳にはいきません。

以上のようなことで「ホクエイ」は、昭和30年代から40年前半にかけて、小麦栽培面積の87%を占めるに至りました。もちろん、このためには多肥密条播栽培試験や、機械化栽培に関する試験がなされており、冬枯病に対しては、農業散布で防除可能という試験結果があったことが、この品種の特性を十分に発揮させたものと考えられます。このように、「ホクエイ」は、収量が多く秋まき小麦栽培を全道に拡大した画期的な品種であったと言って良いでしょう。

しかし、生産量が多くなるとともに、子実の品質が問題となってきました。それは「ホクエイ」の子実が中間質であったため、年次、地域により粉質が変わり、製パン用として不適と判断されたからです。その後多くの品種

が育成されて、それらの品種と入れ替わりました。

ここで考えられることは、日本では多量の小麦を外国から輸入していますが、自国産の小麦用途をもっと真剣に検討し、粉質に応じた製品をつくりだすなど、食糧の自給率を高め、地域の産業振興を図らなければならないということです。

最後に「ホクエイ」が優良品種に決定されるとき、かなりの対立意見があったことを記しておきましょう。それは発表当時に草丈の高い異型個体が1%程度出現したことでした。

これは分離現象ではなく、品種の維持や採種事業に殆ど問題がないことがわかっていたのですが、従来 of 品種決定では、純系であることが品種の条件とされていまして、異型が発現するようでは、品種にすべきではないという強硬なものでした。しかし、協議のあと新品種に決定したのですが、実際栽培では、非常に期待される優良な品種となったのですから、純系にこだわり過ぎて、その決定に反対したことには、反省の必要があると考えられました。

とうふく
倒伏*：一般に小麦は、生育中直立していますが、生育が良すぎたり、風雨などで倒れますが、この倒れることを倒伏と呼んでいます。

< 楠 隆 >